おわりに

中国における山の信仰は、泰山の碧霞元君をはじめ、各地で普遍的行われている。その中で、山は天と結びついたり、大地として豊饒をもたらすものと解釈されたり、死者の霊魂の住まい、あるいは再生までの宿と見なされている。これらは西南地域の少数民族にも共通してみられることである。少数民族の場合、古くからの習俗を保持している民族ほど、山神は狩猟神の役割を担い、また、狩猟神は女神とされることが多い。今後は本稿でとりあげた民族以外の民族について、説話伝承を手がかりに、山神信仰とその社会的背景を探っていきたい。

注

(1) 呂大吉他『中国原始宗教資料叢編』上海人民出版社 一九九三年 六八五～六八六頁
(2) 陶雲逵「碧羅雪山之栗粟族」『国立中央研究院歴史 語言研究所集刊』第一七本 三九四頁
(3) 『中国原始宗教資料叢編』七三二頁
(4) 前掲書 八五五～八五七頁
(5) 左玉堂『怒族独龍族民間故事選』上海不案芸出版社 一九九四年 二八〇～二八三頁
(6) 何星亮『中国自然神与自然崇拝』三聯書店上海分店 出版 一九九二年 三二一頁
(7) 巴莫阿依『彝族祖霊信仰研究』民族出版社 一九九四年 五頁
(8) 馬学良他『彝族原始宗教調査報告』中国社会科学出版社 一九九三年、劉尭漢『我在神鬼之間』雲南人民出版社 一九九〇年を参照した。なお、イ族の祖地は雲南省昭通会澤のあたりとする説がある。（馬学良他 七四頁）
(9) 巴里他 『中国山川名勝伝説故事』雲南人民出版社 一九八一年 ２４５～２４６頁
(10) 夏之乾「納西族象形文字所反映的納西族文化習俗」『民族研究』一九九四年第五期 四七～四九頁
(11) 毛星『中国少数民族文字』湖南人民出版社 一九八三年 九八～九九頁
(12) 雲南省編輯組『寧浪彝族自治県永寧納西族社会及其 母系制調査』雲南人民出版社 一九八八年 一一二頁
(13) 章虹宇「大石崇拝及其習俗」『民間文学論壇』一九八六年第三期 八八～九五頁
(14) 李子賢『雲南少数民族神話選』雲南人民出版社 三二三頁
(15) 陳建憲『人神共舞』湖北人民出版社 二四四～二四五頁
(16) 李子賢 三二四頁
(17) 陳建憲二三五頁
(18) 厳汝嫻他『永寧納西族的母系制』雲南人民出版社 一九八三年 一九五頁
(19) 前掲書 一九八頁
(20) 章虹宇 九三～九四頁

そうこうするうちに夜が明け、ガンムがカオシャの襟首をつかんだままの姿で山となっているということである。[15]次の話は神の祭を行わないと、人間は罰を与えられるというものである。

昔、ガンムの守る永寧盆地は豊かで、人々美しく、賢く、よく働いた。しかし、人々はしだいに怠惰な生活を送るようになり、ガンムの祭も行わなくなった。ガンムは怒り、獅子山を離れた。すると、永寧盆地は荒涼とした土地に変わり、病気もはびこった。人々はガンムに戻ってもらおうと、賢い娘を選び、ガンムを説得した。獅子山にガンムが戻ると、土地は再び豊かになった。[16]

ガンムは豊かな土地を約束するだけではなく、女性の美醜も左右したという。ガンムの住む獅子山に面している永寧の女性は美しく柳腰だが、山の裏側にあるルグ湖の畔に住むのは醜女でがっしりした体格だというのである。[17]

(二)　女神ガンムの出自

女神の住む獅子山は、獅子が横たわっている姿に似ているところから命名されたとされている。納西族語では「ヘティガンム」という。「ヘティ」とは永寧盆地のことであり、「ガン」は山のこと、「ム」は女性を意味する。ガンムの名については普米語による解釈もあるが、ここでは触れない。ガンム山の名が文献に現れるのは明『大明一統志』からと言われている。[18]

獅子山の南側にガンムを祭る廟があり、中には鹿に跨った女性の像が祭られている。[19]永寧盆地の納西族をはじめ普米族、チベット族などから篤く信仰されている女神ガンムはどのような神であろうか。

章氏の報告する小涼山に住む普米族の老歌手曹匹初氏の伝える「崑崙山老祖母とその子孫達」[20]によれば、

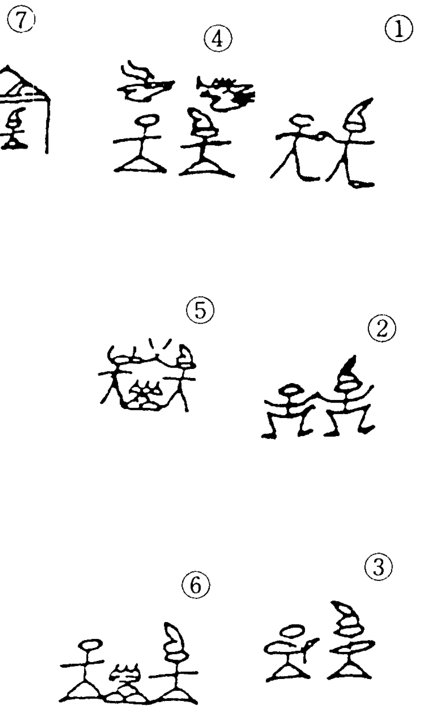
遥か昔、地上にそびえる大山は崑崙山だけであった。のちに、天上の玉龍神が崑崙神と相思の仲となったが、天神王はそれを許さず、玉龍神を地上に落として石に変えてしまった。これが雲南省麗江の玉龍雪山である。崑崙山と玉龍雪山は結婚し、多くの子どもを生んだが、獅子山は最初の孫娘である。

更に続けて、雲南、四川省の山々は崑崙山を女祖とする一つの家系を構成しているというのである。即ち、

女始祖は崑崙山、その夫は玉龍雪山、子供は五男五女あり、男は四川省大涼山、雲南省剣川県の老君山、鶴慶県の石瓶山、耳源県の西山、寧浪県の毛牛山である。女は寧浪県の小涼山、剣川県の石宝山、鶴慶県の龍華山、耳源県の玉壺山、寧浪県の薬山である。そこから、大小涼山が夫婦となり、生まれたのが、獅子山（女）、ワハ山、ツァチ山、アシャ山、四川省のワルプラ山である。

（以下省略）

崑崙山をめぐる石祖神話のごく一部が家系の部分であるが、大小涼山と大理一帯の、民族間の関わりや遷徙経路を踏まえた興味深い話である。



（一） 恋人を持つ女神

永寧ナシ族は、獅子山の女神ガンムを篤く敬っている。ガンムはあまたの山神の長であり、周囲の男の山神をすべてその支配下に置いている。ガンムは永寧盆地に暮らす人々の美と健康、作物の豊饒、家畜の生育を司るとされている。また、結婚と愛情の神でもある。ガンムの美しさを表現して、五色の雲霞を頭にまとい、緑の樹木は女神の眉、軽やかな白い霧は女神の腰帯、ルク湖の珊瑚や瑪瑙は女神の鞋、緑したたる永寧盆地は女神の座る場所と言われる。[11]毎年七月二五日のガンムの祭に近郷近在の人々が集い、早朝獅子山の麓に供物を並べ、女神に向かって叩頭の礼を行う。若者は山を巡り、山の中で一夜を明かす。阿注と同道する者もいれば、山を巡りながら阿注を見つける者もいる。[12]他の報告では、阿注となった男女は、先ず獅子山の洞穴へ行き、数日野宿するということである。[13] そのガンム女神について、次のような話が伝えられている。

獅子山の洞窟に住む女神ガンムは、その美貌によって近くの山々の男神をすべて虜にし、山神の頂点に君臨していた。ガンムの第一の阿注はハワ山神であるが、他にツァチ山神をはじめ多くの山神と阿注の関係を持っているので、男神の間で争いが絶えない。

ガンムの最愛の阿注は四川省の年若い山神トポである。毎晩彼は美しい衣を身につけ、馬にまたがり、五色の雲に乗って獅子山へとやってきて、翌早暁帰っていく。この時空に鈴の音がするので、運がよければトポ神の姿を見ることができるという。ガンムの名は遠くまで伝わり、遥かかなた麗江の玉龍山の男神も阿注となった。このことは他の男神たちの嫉妬を招き、ついに四川省塩源県前所の大白山神がガンムを銀の鎖でつなぎ止めてしまった。[14]

ここではガンムが男神につながれてしまうが、次の伝説にあるごとく、本来ガンムは奔放な女神として存在していたようである。

ガンムの長期阿注はワルプラ神、短期阿注はツァチ神とカオシャ神であった。ワルプラ神が遠出をした時、ガンムはツァチ神と密会したが、事が露見し、怒ったワルプラ神はツァチ神の性器を切りとってしまう。また別の折、カオシャ神がガンムと密会したが喧嘩となり、カオシャ神は遠く離れた蒼山女神のもとへいくことを決心する。それと知ったガンムは、カオシャの襟首をつかんで引き留めようとして、二神の間で小競り合いがおきる。

が守る清浄な場所とされている。最後の魂は愚かな魂で、墓を守る役割を果たす。墓は村に近い山中に設けられる[8]。

このように、彝族にとって山と霊魂とは密接なつながりがあり、魂は山神によって守られているといえよう。

(二) 人間の保護神

山神を祭る目的が単一ではなく、神が複数の機能を備えていると見なされる現象は、比較的遅くに見られるものである。しかも、人格化され、多分に人間臭を持った存在となっている。漢族の伝承ではあるが、山東省泰山の碧霞元君にまつわる説話はその一例である。

遥か昔、仏が雲に乗って住まいとする名山を探していた。山東省にやって来たとき、泰山が目に入り、住むことに決めた。証拠にと、山頂に木魚を埋めて置いた。同じ頃、碧霞元君も住む山を探していた。泰山を目にしたとたん、すっかり気に入り、住まいにすることにして、山頂に刺繍の靴を埋めることにした。掘ってみると、すでに木魚が埋まっている。このままでは泰山は仏のものになってしまう。そこで元君は、すました顔をして、靴を木魚の下に埋めた。やがて、仏と元君が泰山で出会い、互いにこの山は自分の物だと主張した。そこで、山頂に埋まっている順で決着を付けることにした。掘りかえすと、木魚が上、靴が下であった。仏はやむなく泰山を碧霞元君に譲って去った[9]。

この伝承に見る碧霞元君は、欲しい物の為には手段を選ばぬ女神であるが、雲南省のナシ族の崇拝する山の女神も自由奔放な神である。以下に述べよう。

三　山の女神

雲南省永寧地区の納西族は現在も母系制を保持しており、母系によって血縁をたどり、財産も娘によって受け継がれる。こうした社会の中で、とられた婚姻形態が阿注婚である。結婚生活を送る男女を互いに阿注と呼びあうことから、このように名づけられている。

ナシ族は絵文字（象形文字）を持っており、経典は絵文字によって書かれている。その絵文字では阿注は左の如く描かれる[10]。いずれも左が男性、右が女性を表している。①②は手を携えて踊る姿。③は男性が女性に贈り物をしている。④は語り合っている様。男性の頭上の絵は牛、女性の方は豚で、互いの仕事内容を表している。⑤⑥⑦は囲炉裏端や家の仲で睦まじく語らっている様子を表す。

二　山神の役割

多くの場合、山神崇拝は山鬼崇拝の上にできあがったと考えられる。山神と山鬼との相違について、何星亮氏は、（一）山神は善で、人間の保護者であるが、山鬼は悪で、人間に害をなす。（二）山神は一つの山に一柱であるが、山鬼は複数存在する。（三）山神は祭の日が固定しており、集団で祭祀を行うが、山鬼は必要に応じて、例えば病気になった時、祭を行い、個人あるいは家族単位で行うことが多い。としている。(6) このような相違はあるが、しかし、山鬼も山神もある種の役割は共通に持っているように思われる。以下に山神が備えている機能を再確認したい。

（一）　狩猟神

山神を狩猟神として崇拝の対象としたのが最も早い時期の山神観念と考えられる。そにあるのは、山神を獣を支配する神と考え、獣は山神が育てているのであるから、それを捕獲できるのは山神が与えてくれるからであるという考え方である。従って、山に入り、狩猟を行う前は必ず山神を祭り、安全と豊かな獲物を祈願する。また、狩猟が終われば、獲物の一部を山神に先ず捧げ、感謝を怠らない。こうした儀礼は多くの民族に見ることができる。

（二）　死者の霊魂を司る神

山を死者の霊魂の居場所とする考え方は中国以外の民族にも見られるものであるが、中国少数民族独自の事例としてイ族を見ていくことにしたい。

四川省涼山イ族の口頭伝承によれば、(7)

> 昔、この世には「アチャ」と「ワシャ」の二家族だけがいた。この頃は魂が人の体から離れる（死ぬ）ことがなかったので、子孫が次第に繁栄してゆき、ついに人が人を食べるようになった。これを知った天神は一計を案じると、天から鉄棒を振り降ろして人を打ちのめした。鉄棒で打たれると人の体から魂が離れた。体から離れた魂は、今度は生きている人から魂をひき離すようになった。こうして人は死ぬようになったということである。

このように、人が死んだ後でも魂は独立して存在する、というのが彝族の霊魂観である。

彝族は人は三つの魂を持っていると考えている。人が死んだ後、三つの魂の中で最も聡明な魂は祖先が住む地へ帰っていく。魂が旅立つ時、巫師は「指路経」を朗唱して、帰り行く道順を示す。それは山から山を伝う道で、現在地に近い山の名から始まって、次々と進むべき山の名が唱えられ、最後に祖先の地へ到着するよう導いていくのである。祖先の地は彝族発祥の地であり、高山あるいは雪山の中にある桃源境のような楽土と認識されている。

さて二つめの魂は、聡明でも愚かでもない普通の魂で、霊牌（竹根で作られた筒状のもの。位牌のような役割を果たす）の中に安置され、家の中に祭られる。一定期間を過ぎると、深山の崖にある祖霊洞に移されるが、そこは山神

立て、供物を供え、巫師が祈りを捧げる。霊樹をミスニとみたてているのである。[2]

碧江地区のリス族にはミスニについて次のような話が伝えられている。[3]

昔、ミスニと人間は従兄弟だった。両親が早くに亡くなったため、ミスニは人間の家に預けられるが、人間の親がいじめるので家に帰らなくなる。ミスニは野獣と魚を自分の所有物とし、兄弟に家畜を与る。兄弟の取り分が少ないと感じたミスニは、犬を兄弟に与え、犬を連れて狩をするよう教える。人間は以後ミスニを祭って狩の獲物が多いよう祈るようになった。

この話を伝える碧江地区のリス族は、山鬼ミスニを最も権威のある鬼で、山林、土地、石などに宿る鬼はすべてミスニの管理下にあるとしている。病人が出たり、日照り、風害などがあると、必ずミスニの祭が行われる。

碧江地区ではミスニは男とされているが、武定地区では、隣合った二つの村がそれぞれ祭る山神は姉妹だということである。願い事がある時は、姉妹山神を同時に祭らなければならない。この姉妹山神には碗貸話が伝えられている。また、この地の人々は山神を祭ること篤く、山神の住む山を通る時は帽子を取り、木を切らず、汚さず、また、山林には女性が入ることを禁じていたという。

(三)　ヌー族の山鬼

ヌー族も鬼、神を明確に分けていない。最も重要な鬼神は山神であり崖神でもあるミクウである。この神は狩猟と農耕も司る。地域によっては、ミクウに家神の要素が加わることもある。また、貢山地区のヌー族はあらゆる神の職能を一身に集めた神チミタを祭っている。この神は女神で、生殖崇拝とも結びついている。女神の住む山の鍾乳洞の水滴は仙乳とされ、病気平癒、子授け、乳幼児の生育を見守るなどの効果を持つと信じられている。焼畑を行う前に、先ず、崖神を祭らなければならない。また、狩に出かける前にも崖神を祭り、豊猟であれば礼をする。三月一五日は朝山節で、全村こぞって祭を行う。山林節は蘭坪地区の祭であるが、通常男が執り行い、女性は参加しない。崖神は崖で死んだ女性がなる。または崖神に連れ去られた女性が崖神の妻となるとされている。[4] 崖神が人々の結婚を司ることもある。碧江一帯のヌー族には崖神の嫁取りの説話があり、崖神にさらわれて嫁になった娘は、二度と実家に戻る事はできないと伝承されている。[5] 上述のトゥーロン族の伝承も含めて、崖は異界との境界と見なされているのであろうか。

以上見てきた山鬼（山神）に共通しているのは、狩の神としても機能していることである。さらに、農耕神や雨神の要素を見ることもできる。例えば、トゥーロン族の正月の由来譚では、山神と焼畑が密接に関係している。また、一族の繁栄を司るなど、いくつかの役割を果たしているようである。

が強く、しかもかなり細分化した鬼が存在しているようである。トゥーロン族、リス族、ヌー族にその例を見ることができる。

(一) トゥーロン族の山鬼

トゥーロン族は雲南省の西北角にあたる怒江の上流域に暮らす民族で、険しい山間部に居住し、外界との接触も少ない。今世紀の五〇年代、一五の父系氏族が存在していた。芋類を中心とした畑作も行うが、主要生活手段は狩猟と漁労である。彼らには神を表す語彙が発見されておらず、鬼を表す「プラン」という呼称が使われている。多くの場合、鬼は人に害をなす存在である。トゥーロン族が最も恐れている鬼は「チプラン」といい、山鬼のことである。崖鬼とも呼ばれる。チプランがなぜ生まれたか、次のような物語が伝えられている。(1)

昔、ポンカインという男が地上に住むあらゆる人間と動物を集めて九日九夜の盛大な祭を行った。祭の最後に、残った酒食を参会者に公平に分けたが、最後の五人には肉が残らなかった。そこで五人は山へ狩に行くことにした。獲物を駆り立てる役の男が犬を連れて山に登り、残りの四人は麓で合図を待った。間もなく崖の頂で犬の声がして、動物が下りてくる気配がしたが、いくら待っても獣も人も犬も姿を表さない。四人は心配になり仲間を捜したが、見つけることはできなかった。翌日も四人は捜し続けて山の崖に来たとき、空が急に暗くなって、颪が吹き荒れ、雨が降り、雷鳴が轟いた。驚き慌てる四人の耳に、行方不明になった仲間の声が聞こえてきた。崖の中から響いてくる声が言うには、俺はチプランになってしまった、村に病人が出たら供物を持ってくれれば治してやろう。食事の時はいつも俺にも分けてくれ。それ以後、トゥーロン族はたたりを恐れて、チプランに捧げ物をするようになった。

このように、チプランは恐ろしい鬼ではあるが、所定の祭事をきちんとすれば人々に幸いをもたらしてくれる。例えば、チプランは山の崖から各家の出来事をつぶさに見ているので、鶏や豚を料理したり、酒を作った時は、先ずチプランに捧げる。それを怠るとその家に病人が出るとされている。また狩猟で山に入る時は、穀物、酒、穀物粉を練って獣の形にしたものを山の大樹の前に並べ、チプランを祭ってから狩を始める。そうすることにより、豊かな獲物と、安全を約束してくれると信じているのである。

(二) リス族の山鬼

リス族には神と鬼の区別はなく、人が死んだ後に化す鬼も、山川草木道などに宿る鬼も「ニ」と呼ばれる。ニには善と悪とがある。山鬼はミスニと呼ばれ、山林、農業、道路を支配するとされている。村毎にミスニを祭る場所があるが、特定の建物や像はなく、大樹が一本あるだけである。この木は霊樹とみなされ、この木の下で毎年旧暦の四月に全村をあげてミスニの祭が行われる。木の周りに白い旗を

西南中国における山神崇拝の伝承と儀礼

新島　翠

The Folktale and Ceremony in the Worship of Mountain Gods in Southwest China

Midori Niijima

Abstract

Many of the peoples in the world regard a mountain as their sanctuary and admire it. This is also true of the peoples in southwest China; they believe that their gods dwell in the mounatains. They consider the gods to be capable of saving their lives, so, they worship them. However, they also believe that the gods may harm them; therefore, they make religious services to avoid displeasing them. In this paper I discuss the mountain gods that the peoples in southwest China believe in, and the legends and rites that they inherited from their ancestors. I then consider their respective beliefs of the mountain god and the societies where their beliefs are reflected.

Key words:
mountain gods, southwest China, worship, folktale, religious ceremony

はじめに

世界の多くの民族が、山を聖域として崇拝の対象としているが、西南中国に居住する諸民族も同様である。彼らは山には神が鎮座しており、山神はあまたの神の中で最高位にある神と考えている。山神は人間を守り、幸いをもたらす守護神として崇拝されているが、しかし同時に、この神は一度機嫌を損ねると人間に害をなす存在と化す。そのため、人々は神の不興を招かないよう祭祀を行う。本稿では、西南中国の諸民族の山神について、伝承されている神話、儀礼を手がかりに、各民族独自の山神観と、そこに反映されている社会を見ていくことにしたい。

一　山鬼と山神

少数民族の宗教意識には様々な状況があり、すべての民族が神について明確な概念を持っているとは限らない。神よりも鬼（霊魂、精霊）に主軸を置いた生活を営んでいる民族もいれば、善良で美しい者を神とみなし、凶悪で醜悪なものを鬼とする民族もいる。さらには、鬼と神とを明白に区別していない民族もいる。とりわけ原初的な文化を保持してきた民族では、往々にして鬼と神とが同義語であることが多い。これらの民族では、神よりも鬼の観念のほう